

## 再び「六道さん」

妻が住職をしている京都市内のお寺の境内墓地では、毎年8月7日から多くの檀家さん、その親類の皆さんが墓参りに訪れます。それまでに寺方は盆棚経参りを済ませ、比叡山の山奥で採れたしきみ 檜（色花は御供えしない習慣）の束を仕入れ、テントを張って準備します。京都では、墓参の時に水塔婆をあげる習慣があり、7日から15日までテントの下で朝から夕まで筆を握ることになります。1軒に5枚から10枚、それ



れも親類の方もその枚数を個々にあげられるので膨大な枚数になります。

そんな墓参に来られたおばあちゃんが毎年口にされることがあります。「今年はもう止めようと思うのやけど、六道さんの迎え鐘に並んでしまいましたわ。えらい修行ですわ…」盂蘭盆の恒例の挨拶みたいなもので、京都市東山区にあるろくどうちんのうじ 六道珍皇寺（六道さん）の「六道参り」が始まると妻のお寺も忙しくなります。

六道参りは8月7日から10日まで、朝6時から夜10時まで多くの人で賑わいます。京都では、お盆で里帰りされるご先祖さん（お精霊さん）は六道珍皇寺の境内にあるあの世につながっていると言われる井戸から出てこられます。六道参りはご先祖の精霊をお迎えに行く行事なのです。



まず、山門入った所のテントで高野こうやまき 檜の枝を購入します。600円です。高野檜は清らかな香りがして、井戸から出ていらっしやったお精霊さんはその枝に乗られます。そして、そつと丁寧に自宅まで持って帰ります



次に先ほど登場した「迎えの鐘」をつかさせていただきます。その際押すのではなく、打ち棒からのびる紐を手前に引っ張り込むと鳴るようになっていきます。梵鐘は上写真の建物の中に納められ見ることはできません。この鐘の音をお聞きになったお精霊さんは六道の辻で迷うことなく難儀することなく井戸までたどり着けるのです。日本人の死者を敬う心がそうさせるのでしょうか。ただし、つかさせていまだに40分から50分の間炎天下で並ばなければなりません。それが最初登場したおばあちゃんの言葉なのです。もう齢ですし熱中症になるといけないから今年から並ぶのは止めようと思って家を出るのですが、いざお寺へ行きお精霊さんのことを思うとつい今年も並んでしまいましたということなのです。日本人は美しいですなあ。



次に水塔婆にお精霊さんの戒名を書いていただき、これを香に薫じ、地藏尊宝前にて、水塔婆をその場に用意された高野檜で水回向を行ない、その場所に納めます。